

# 血液内科

## 概要

部長：石川 隆之

スタッフ：7名（5名は日本血液学会指導医）

専攻医：5名

非常勤医師：先端医療振興財団の医師1名

外来：予約外来と新患外来（ともに月～金、午前・午後）の2.5診体制

2018年の診療実績

1) 年間受診新規発症患者数：

急性骨髄性白血病 52名、急性リンパ性白血病 15名、悪性リンパ腫 137名  
多発性骨髄腫 24名、骨髄異形成症候群 33名  
再生不良性貧血 11名、骨髄増殖性腫瘍 28名

2) 年間造血細胞移植施行数：

同種造血幹細胞移植 37件、自家造血幹細胞移植 20件

3) 入院患者数

60名

## 特徴

悪性リンパ腫や多発性骨髄腫などの治療は初回治療を除き原則として外来化学療法部で行われるが、急性白血病の治療や、自家ならびに同種造血幹細胞移植は、本館と南館と合わせ30床の無菌病室をフル回転して行っている。自家ならびに同種造血幹細胞移植は、患者さんにとって最適な時期に行うことが肝要であるが、当科では非血縁移植を除き移植の待ち時間はない。また当院は救命救急センターであり、血栓性血小板減少性紫斑病などの希少な非腫瘍性血液疾患に接する機会も多い。

入院診療は、3名のスタッフ医師と、2-3名の専攻医よりなる診療チームを単位として行われている。現在診療チームは2つあり、それぞれおよそ30名の患者を担当している。患者さんごとに主治医を置くものの、重要なICや治療手技においては、診療チーム全体で対応している。また、患者さんの病状や治療方針はチームのすべての医師が理解し、把握している。診療チームを作ることで、若手医師は常に上級医師の指導を受けることができ、入院から外来診療への移行に際してもスムーズな引き継ぎが可能となった。また、休日・夜間の診療水準の確保とともに、専攻医も気兼ねなく学会出張ができ、体調不良時などにも十分休養が取れている。

当科では外来診療の占める役割が年々大きくなっているが、2年目以降の専攻医にも外来枠を確保し、外来での化学療法などを経験してもらっている。外来では他科からの紹介患者も診療するため、特発性血小板減少性紫斑病や巨赤芽球性貧血といった入院診療ではめったに遭遇しない血液疾患の経験をしてもらっている。

近年新規分子標的薬剤が数多く開発されている。当院ではこれら新規薬剤の開発治験に数多く携わっている。最近では国際共同試験が主流となっているが、これらの第3相試験に加えて、新規薬剤の第1相試験も行っており、これらの治験を通じて近い将来の医療を展望することが可能になった。また開発治験に関わった薬剤の発売時には、これらの薬剤の特性をすでに熟知していることから、臨床現場へ速やかかつ適切な導入ができるようになった。

学術面では、診療成績の向上を目指した後方視的検討を推奨している。今まで多くの研究が日本血液学会総会のみならず、米国血液学会（ASH）や欧州血液学会（EHA）など国内外の一流学会で報告され、論文化もされてきた。平成23年以降の9年間に当院の専攻医、若手医師を筆頭者とする演題がASHに29題採択され、うち2題は口演に採択された。また14題がabstract achievement awardを受賞した。ASHやEHAという世界一流の学会に自らの演題をもって参加することは専攻医にとってかけがえのない経験になっている。

## 一般目標

貧血などの血球減少症、血球増加症、不明熱、リンパ節腫脹、肝脾腫、出血傾向などを呈する患者に対して、しっかりとした鑑別診断を立てたうえで正確な診断ができること。診断確定後には、適切な治療計画を立てることができ、確実に遂行できる能力を養う。治療には同種造血幹細胞移植のみならず、緩和的医療も含まれる。

## 行動目標

- 1年目：** 骨髓塗抹標本スミアを読み、血液疾患の鑑別診断ができる。また治療効果の評価ができる。  
造血器腫瘍それぞれに対する標準的な化学療法を理解し実践できる。  
同種造血幹細胞移植の適応を理解する。
- 2年目：** 骨髓生検やリンパ節病理標本の所見が理解できる。  
入院中に受け持った患者を外来でフォローできる。  
外来化学療法を安全に施行できる。  
新規発症血液疾患患者における治療方針を主体的に立案し、実行できる。  
再発患者、難治性患者に対して救援療法を立案し施行できる。  
造血幹細胞移植の併発症を診断し適切に対応できる。  
治療成績の向上を目指した後方視的検討を行い学会や研究会で報告する。  
前方視的臨床研究（治験を含む）に参加する。  
英文もしくは和文で症例報告を1編以上投稿する。
- 3年目：** 外来を新規に受診した血液疾患患者を診療し診断することができる。  
同種造血幹細胞移植のドナー選択、幹細胞源の決定、前処置やGVHD予防法の立案でき、併発症に対して適切に対応できる。  
国際学会で演題を報告する。
- 4年目：** 臨床試験の立案ができる。

3年目以下の専攻医の指導ができる。  
診療チームのなかでリーダー的役割を果たせる。

### 週間スケジュール

	朝	午前	夕
月			内科カンファレンス
火			血液病理カンファレンス
水	抄読会		
木			入院患者カンファレンス
金		回診	

### 専門研修プログラム

神戸市立医療センター中央市民病院内科専門研修プログラムは、当院ホームページをご参照ください。

URL : [http://chuo.kcho.jp/recruit/late\\_resident](http://chuo.kcho.jp/recruit/late_resident)

### 見学等問い合わせ先

石川 隆之 : [ishikawa@kcho.jp](mailto:ishikawa@kcho.jp)